

## 一 評論

### 【解答例】

(一) (1) 軽快 (2) 紛(れる) (3) 脅(かす) (4) 洞窟 (5) 残酷

(二) 人間の芸術と違い常に完璧な文様と色彩を誇る翅の美。(25字)

(三) 蝶が翅の両面の色彩を使い、樹皮の色と同化したり目立ち仰天させたりして天敵から身を守ること。(45字)

(四) 翅の色彩や文様で捕食者から身を守ろうとするほど、逆に人間にとって蝶は完璧な美の象徴として収集欲の対象となってしまう状況。(60字)

(五) 子々孫々誤ることなく美しい文様を翅に反復できる完璧な生命の芸術品としての蝶と比べ、人間は美しい形象を不完全にしか反復することができない存在であるから。(75字)

### 【解説】

(一) 言葉としては難解ではないが、書き取りということになると受験生間で差が出る問題かもしれない。特に「洞窟」は読めても書けない受験生が多いと思われる。

(二) 蝶に人間が持っていないところがある以上、字数制限は厳しいが対比的に記述するのが望ましい。最終段落の「蝶の翅の完璧な芸術への、抑えがたいジェラシー」という記述に着目し、「嫉妬」の対象である蝶の翅について説明すればよい。最終段落に即して、子々孫々常に誤ることなく文様を受け継ぐという不変性、そしてその文様と色彩の「完璧」な美しさについて過不足なくまとめる。

(三) 傍線部直前までのルリタテハの例に即してまとめる。「隠蔽」とは地味な裏翅を用いて樹皮の色に自分を同化させて外敵から逃れること、「顕示」は目立つ色の表翅を出すことで敵を驚かせて身を守ることである。単に同化させること・驚かせることというだけでなく、この二つの方法を場合に応じて用いることで自分の身を守っているという、使い分けの目的にも言及する必要がある。

(四) 傍線部とその前後をわかりやすく説明する。蝶の翅の文様や色彩は、本来自身を外敵から守るためのものである。しかしその翅を使って身を守ろうとすることが、人間に対してだけは逆に蝶への興味を持たせる結果になってしまう。このような逆説的な状況を述べているのが傍線部である。

(五) 「対比」を指定されているので、蝶の翅の美しさがどのような特徴を持つのかをまとめる必要がある。(一)の解答も参考になるだろう。ロジェ・カイヨワが人間の「悪しき絵画」と蝶の翅の「不変の完成品」を対比させていることに注目すると、蝶の翅は完成された美をいつまでも変わることなく受け継いでいくことができるものだが人間は不完全な反復しかできない、という対比が浮かび上がってくる。人間の芸術に関する本文中の記述が少ないが、まず蝶についての記述を抑え、その裏返しとして人間について考えていけばよい。

## 二 小説

### 【解答例】

- (一) 本を出した気はないという明確な意志に反するから。(24字)
- (二) すべて白紙の本を出版すること。(15字)
- (三) 創造に興味は無く、読者の想像力を解放する小説が無い現状を作家に伝えただけだという考え。(44字)
- (四) 読者の想像力が制約を受けず十分に刺激され、満足する気持。(28字)
- (五) 読者の想像力を刺激しない作家達を徹底的に批判した強い意志に共感しつつ、それは自分にも向けられている批判だと自覚しながらも圧倒され反論できないから。(75字)

### 【解説】

(一) まずは「いい本」と評価する「小説家」への反発に言及されていればよい。解答を作る際には表現に注目してみよう。「打ってかえすように」は時間的な間隔を置かない様子であり、「つっぱねる」は拒絶することを表す。白紙の「本」を出版した人物は「小説家」の「いい本ができましたね」という言葉をすぐに拒絶したということだが、ここに強く明確な意志・反発を読み取ることができるだろう。また拒絶した理由は直後の「本」の作者の言葉に表れているように、いわゆる「本」でないものを出す狙いを持っているからであったので、そこを盛り込んで25字に収める。

(二) 深読みすることもできるが、15字という制限を考えると、本の中身がすべて白紙ということがまずは書けていればよい。

(三) 直前の、自分は創造者ではなく表現者であるという「本」の作者の自己規定が直接の解答になる。この部分をうまく言い換えればよいが、その際には表現したい「ある状況」の内実や「さっさと消えてなくなる」といった言い回しにも注意を払わなければならない。「ある状況」とは、読者の想像力を促すような小説家や作品が不在である現状を指し、「さっさと消えてなくなる」からは、創造者としての「作家」という今の立場に全く固執していない気持ちの表れとすることができるだろう。

(四) 「そういう気持」が何を指すのかに悩まされる。直前の「書かなくてよいと考えることもできますしね」だけを指すことも考えられるが、直後の「そういう気持を起させるようなしみじみした本は近頃あまりないのじゃないんですか」や直前の会話文を考えると、要するに書く書かないを問わず、また自身の人生に照らした半可通の批評の及ばないような、読者の想像力が様々に刺激されるような本を「作者」は求めているということがわかる。そこをまとめればよい。

(五) 「そういう気持」を読者に起こさせない不甲斐ない作家たちを一網打尽に切り捨てる「激しさ」「かたくなな強情さ」が「本」の「作者」にはあり、「小説家」もそこに共感し惹かれていたのだが、不甲斐ない作家たちの中に自分自身が含まれていることはよくわかっているも、その強い意志に圧倒されて怯んでしまっているのである。何に感動し、何にたじろいたのかを中心に記述すると書きやすいだろう。

### 三 古文

#### 【解答例】

- (一) (ア) しばらく経って日は暮れた (イ) なんとなくぞっとする感じがした
- (二) 明日にも月見の機会があるだろうと思って約束を破るあなたは薄情だし、そんなあなたの考えが浅いと思われるくらい美しい今日の月夜であるなあ
- (三) 私に明日も月見はできると思う心の怠慢がない様子は、今日の秋の夜月のように澄みきっています。(45字)
- (四) 高いうてなの上で月見し歌を詠む千本の声。(20字)
- (五) 日暮れが待てず友人より先にうてなに登り、翌日彼の約束違反を責めながらも昨夜は探すこともせず、月に心惹かれ一晩中歌を詠み続けたこと。(65字)

#### 【解説】

- (一) (ア) 「とばかり」で「ちょっとの間」の意であるが、「とばかりありて」で「しばらくして」という慣用表現であることを覚えておくとよい。「ぬ」は完了の助動詞。
- (イ) 「そぞ〔ず〕ろ～」は「なんとなく～する」。ここでは「寒し」の修飾語となっていることと、文脈上物理的に寒いわけではない部分は意識した。完了の助動詞「つ」の訳出も忘れないこと。
- (二) 千本の家人たちの反応「月を見るなら明日がよい。今日にこだわる必要はない」、そして俳諧師が千本に約束を破られたとと思っていることを踏まえて訳出することが望ましい。「明日ありと思ふ」が前述の千本の家人の言葉を指していると思われる。「あさき」は「今日にこだわる必要はない」というような考えの浅さに加え、約束を破る千本の情の浅さ、薄情さも含意していると考えられるだろう。「あさき」までと「月夜かな」のつながりを訳出するのに工夫が必要。「明日でも良い」という考えが浅はかに思われるほどの良い月夜である、という意味合いでつなぐとわかりやすい。
- (三) 前問同様に「さやけき秋の夜の月」とその前までとのつながりをどう訳出するかがポイントになる。「さやけき」という秋の夜の月にかかる形容が、同時に「おこたり」のない詠者の「心」にかかるものであることがわかるように工夫して訳す。大意は「月見の機会は明日もあると思うような心の怠惰はなく、その心は澄んだ秋の夜の月のようなものである」となるだろう。
- (四) 後ろから三行目「かくばかりうてなの上にて歌吟じければ、夜中に声ありと思ひしも理なり」に注目する。この箇所から、声の主が千本であることは明らかである。それがなぜ「中空」から聞こえたのかという点も問題になるので、高いうてなの上にいるということもしっかり踏まえる。「うてな」は「高台」程度の意味であるが、雅語であり、注もないので、そのまま使用して可と思われる。
- (五) 「言動」という問い方が扱いづらい。まず千本の「言」がどのようなものかということ、千本は月見に来なかった俳諧師を責める言動をしている。しかし俳諧師がやってこなかったにも関わらず、千本は途中で俳諧師を探しに行ったり帰ってしまったりすることなく一晩中月を眺めて歌を詠んでいたことが、俳諧師が聞いた中空の声からうかがえる。このような行動に千本の月を愛する風流心が伝わってくるというのである。

## 四 漢文

### 【解答例】

- (一) (1) あによく (2) ついに  
(二) (3) そうよりろうにいたるまで (4) これをちにほる  
(5) うるとえざるとをろんずるなくして  
(三) (a) 若い時から鉱石から金属を取り出すことを生業としていた  
(b) 一日の労力を使い果たしたとしても  
(四) 富貴を手にするには天や人の力が要るが、どちらにも頼らず地から金を掘ろうとした点。(40字)  
(五) 同様に利益を求める点で衆人は羅麻を笑うことはできず、地を掘った羅麻よりも人にへつらって利益を求める衆人の方が醜悪だから。(60字)

### 【解説】

- (一) 基本的な語の読みを問うている。確実に得点したい。
- (二) (3) 「自<sub>レ</sub>A至<sub>レ</sub>B」で「AよりBに至るまで」と訓読する。英語で言う「from A to B」の形。  
(4) 「述語+名詞+於+名詞」の形の場合、「(S) + V + O + C」の構文をとりやすい。  
(5) 「得与不得」は「A与<sub>レ</sub>B」、つまり「AとBと」の形。「無論」は「論無し」と訓読するが、傍線直後に「而」という置き字があるので「して」という送りがないとよい。
- (三) (a) 「冶鑄」は受験生には訳しにくい。辞書的には「金属をふきわけること」という意味だが、「金属を扱う」ことに触れてあれば幅広く許容されると思われる。「少」は次の句の「長」に対応しており、「若い」という意味。あとは全体として「以<sub>レ</sub>A為<sub>レ</sub>B」、つまり「Aを以てBと為す」(AをBだと思ふ、AをBとする)の句形となっていることにも留意する。  
(b) 直前に「賤而且勞」、直後に「所得不過百錢耳」とあるから、文脈上「日之力」は「一日分の労力」、「窮」は「使い果たす」という程度の意味になることは予想しやすい。後は直後の「所得不過百錢耳」にスムーズに繋げるには、傍線部末は逆接仮定の形で解釈するとよい。
- (四) 設問にどのように答えればよいかはまず分かりづらいが、「憫」「笑」や「溺」「拙」を並列して書き表している点に注目すれば、それらそれぞれに分けて説明することを求めているわけではないことがわかる。そもそも作者の意見と衆人の意見は必ずしも一致していない点は慎重に見極めなければならない。衆人は羅麻の計画の拙さを笑い、財に溺れた様子を哀れんだが、作者は「富貴の権は、天 実に之を主り、人 実に之を操る。麻 既に天に得ず、人に求めずして、顧だ切切焉として之を地に掘る」と述べ、富貴(世俗の成功)は天と人とに関係しているにも関わらず、麻はそのどちらにも求めなかった点に注目している。ここをまとめればよい。
- (五) 傍線部(5)は「広く天下を眺めると、悼むことをこらえきれない」の意味。天下の隅々にまで作者が嘆くような事態が広まっていることを指す。その内実を読み取っていく必要があるだろう。直前の内容は以下のとおり。まず作者から見ると「衆人は羅麻を馬鹿にしているが、利益の追求に躍起になっている点では羅麻と同レベルであり、羅麻は手を使うだけなので不利益はあまりないが、衆人は利益のために有力者に媚びへつらい、人間としての品位を損ねている点では羅麻以下」という主旨である。羅麻以下の様子の人物が多くいることを作者は嘆いているのであった。あとは語釈の文章を参考にしつつ、字数に収まるように書いていく必要がある。